倉橋由美子文芸賞　選評

〈 生方 智子 〉

今回の投稿数はこれまでの中で最も多く、総数にして四十八作品であった。しかし、作品全体としては推敲不足なものや凡庸なものが目立ち、残念ながら大賞は出なかった。また、三名の選考委員が全員一致して評価できる作品が殆どなく、長時間の討議の中で、かろうじて三作品を佳作として選出するに留まった。

「募集要項」の「応募を迷っている方、初めての応募を考えている方へ」という文書の中に、投稿者へのアドバイスが記載されている。注意すべき事柄として①応募の前に推敲を行うこと、②学校生活や家族を題材にすると凡庸になりがちであること、③題名を工夫する必要があることの三点が指摘されているが、今回、かなりの数の応募作品が、この三点のいずれかについて難があると問題になった。

また、今回の応募作品の中に、新型コロナウィルスをテーマとしたものも見られた。それらの作品はいずれも意欲作であり、書き出しが魅力的なものや、物語の半ばまで巧みにプロットが進んでいくものもあった。しかし、多くがテーマを消化しきれず終わってしまった。その中で、「死因：スマホ死」は突出した完成度を持つ作品である。〈スマートフォンと人間が同期した世界〉という超現実的でＳＦ的な設定で作品世界が構築され、その世界設定の中で登場人物たちが活動し、緊張感をはらんだプロットは最後まで維持されて読み手を惹き付けた。タイトルに工夫がなかったのが惜しまれる。

「蚊」による一人称語りによってプロットが進んでいく「翅の音」は、視点の設定のユニークさや語り口の巧みさ、タイトルの魅力で好印象を残す作品である。ただし、「蚊」として生きるという状態が人間から見た予測可能性の域を出ていないのが物足りない。「波枕」は、終始一貫して思わせぶりの書き方で、語られているものが何を意味しているのか伝わらない。縦書きのプリントアウトにもかかわらず、それに対応しない文字入力であることも含めて読者への配慮が必要である。個人的には「小鳥ちゃんは透明」に魅力を感じたが、実際の個人名が不用意に出てきて誤解を招く恐れがある。広く読まれることを意識してほしい。

〈 渡辺 響子 〉

小説を書く、最後まで書き上げるというのは大変なことである。今年の応募作が史上最多の 48 篇に及んだのは、だから嬉しい驚きだった。今年も大きく二つの傾向があったと言えるだろう。一つは、果敢に大きなテーマに挑戦したものの、勢いが続かず、先細りになってしまったもの。チャレンジ精神は評価したいが、倉橋由美子の名前を冠した大賞には、あと一歩及ばなかった。もう一つは器用に書いているものの、こじんまりまとまって今ひとつパンチを欠いているものだ。

『死因：スマホ死』は、安易にスマホ依存を描くのではなく、依存が高じて政府が、スマホと所有者の寿命を同期させた近未来という設定が効いている。 政府の介入は最初の説明に出てくるだけで、あとは高校生の視点から描かれているのが良い。前世代から便利なものだとは知らさ

れているが、持っているだけで使えないという不条理な状況にも違和感なく入れるし、細部も破綻なく、名前などの布石もうまく機能している。

蚊を主人公とする異色の設定の『翅の音』は、一匹の蚊が血を吸う多様な人々とその空間を細やかに描いていて、淡々とした語りも好ましく思えた。ところどころ説明的な文章が出てくるのと、結末がやや唐突なのが残念に思われる。

『波枕』は、謎の集団と出会って視覚以外の感覚を通して世界を再認識し、その体験のおかげで、浴室に引きこもった弟が向き合っていたものに接近する物語と読んだ。双子という設定は、より効果的に活かせたかもしれない。

『すみっこ革命』をはじめ、学校やバイトなど身近な場での出来事を、少しひねった「システム」に組み込む作品も多く見られた。劇画調文体の選択、飄々とした語りは否定しないが、それは塾考の果実であるべきだ。

『アオイオモイ』や『代えがたいってほどじゃない』のように、物事や人間を多元的にみることをモチーフにした作品、戦争中の若者の存在論的不安を描こうとした『セミデウスの門柱』などにも今後の可能性を見た。

応募作はいずれも光るものを内包している。小説というジャンルと真剣に向き合った上で構成・文体を磨き、次回作に臨まれることを期待している。

〈 井上 善幸 〉

今回は、例年にも増して多くの作品が寄せられたようで、慶賀すべきことと思います。全体を読み通してみて、その質の高さに驚嘆しました。心から敬意を表します。

不満もあります。発想の奇抜さにこだわりすぎ、二つのマイナス要因を抱え込む結果となっていることです。一つは、そのような着想を追うあまり、物語をどう終えるかという問題に直面し、不自然な終わり方に追い込まれている作品があったように思います。それでは困ります。

もう一つのマイナス面は、文体の問題です。物語の展開に気をとられ、文体そのものが練れていない、表現が内容を貧しくしているという印象を受けました。思考を支える文章もしくは文体そのものにもっと自覚的になる必要があります。

「翅の音」は語り手が蚊であるというユーモア感覚が冴えていました。「私たち『蚊』と呼ばれる生物」という冒頭の表現がある以上、「私は蚊である」と表明することは不要であると思います。すでに漱石の『猫』もある訳ですから。蚊の幽けき生を動物相と植物相のもとに描き、それが抑制のきいた文章と相まって静謐に表現されているとみました。

「死因：スマホ死」は、ぼくはあまり高くは評価できません。命を数量化する着眼点はいいとしても、「スマホ」に歴史的遠近法を施しながらも、それを批判的に捉える思考が与えられていないと思います。小説のタイトルにコロンを用いるというのも馴染めません。また死因はせめて「スマホ」とすべきであって、「スマホ死」としてしまっては、結果ということになりはしませんか。

「波枕」は引きこもり的存在の洋太が重要な要素を占める作品です。カフカの『変身』を想起させるような設定で、里帆の「ほたるび」での体験は、彼の存在が影を落としているようです。最後に洋太はいなくなりますが、個人的には、そのような結末でよかったのか、と思います。漱

石の『こころ』ではKが「先生」の心奥に棲みつくことで作品全体を黒に染めあげますが、ここでは洋太を昇華させることで、「西新の、あの穏やかに微睡むような海」の潮騒を聴かせようとしているようです。作者の祈りがそうさせたのかもしれません。

もっとも刺激的に映ったのが「ソドムの一隅」です。今回は受賞を逃しましたが、文体面からも読みごたえのある作品でした。とくに後半のタブローに描かれたイマージュを記述する手つきには、どこかフランドル派の絵画を彷彿とさせるような、あるいはその銅版画が動き出すような錯覚に襲われました。似たような感覚をアラン・ロブ＝グリエの『迷路のなかで』を読んでいた時に感じたように記憶しています。晩という名の主人公が滞留する「教会」は三階建で、これは地獄、煉獄、天国が暗示されているのかもしれません。その閉域からの脱出が夢見られているようですが、作者は安易な出口を与えてはくれません。

「往日」も受賞には至りませんでしたが、読ませます。この書き手には批評精神があります。登場人物に『ワインズバーグ・オハイオ』を賞賛させるかと思えば、「アンナ・カヴァン的暗闇」といった表現さえ出てきます。怪談的語りの部分には冴えを感じました。